

第 9 回

五輪の夢追う最速スケーター

鈴木 恵 一

suzuki keiichi

坂本九さんの「上を向いて歩こう」が「SUKIYAKI SONG」として世界中で大ヒットしていたころ、欧米では知らない者はいないほど有名な日本人スピードスケート選手がいた。「SUKIYAKI KEIICHI」として、通関で顔パスになるほどだったというその選手の名は鈴木恵一さん。世界記録を何度も塗り替えた名スプリンターも、しかし、オリンピックのメダルには不思議と縁がなかった。

「その看板で生き延びられるのは金メダリストだけ」

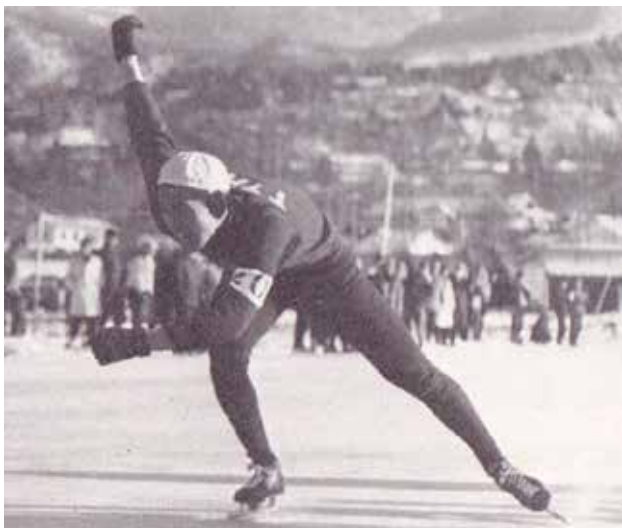
そう断言する鈴木さん。現在は日本スケート連盟で、自分の経験に基づき金メダリスト育成に情熱を傾けている。メダル獲得に足りなかったもの、札幌オリンピックでの選手宣誓、日本のスポーツ政策の問題点などについてお話を伺った。

聞き手/西田善夫 文/山本尚子 構成・写真/フォート・キシモト

## 初めての 全国放送インタビュー

— もう何十年前になりますか、私が初めて取材対象者のご自宅に伺ってインタビューをしたのが、鈴木恵一さんでした。当時、NHK室蘭勤務時代でした。

高校3年生でしたから、1961年ですね。



インターハイ初優勝(1960)

— ああ、もう50年になるのですね。

無名の僕に取材なんてあり得ないと思いました。高校2年のときの国体で、当時、中距離の代表の僕が、短距離の500メートルの選手がないからということで出場したら好記録でぶっちぎりの優勝。1500メートルでも優勝して、

そのころから「鈴木はすごい」という話になっていったと記憶しています。

— 私も初めての全国放送でしたし、高校生の全国放送なんて珍しいのですよ。ご家族と一緒に、ずいぶん長時間、和やかにお話を聞いたことを覚えています。

## アイスホッケーから スピードスケートへ

— 鈴木さんがスケートを始めたのは、苫小牧という土地柄、自然にでしょうか。

僕は樺太で生まれ、青森に引き揚げ、5歳のとき、父が王子製紙に務めていた関係で苫小牧に移住しました。苫小牧はスケートをする環境に恵まれていると同時に、先人の方たちによって築かれた「伝統」があるのが大きいと感じています。「サバナイ沼」というところがあって、夏はそこで泳ぎ、冬は全面凍結します。野球場が2~3面取れる広さで、氷上で野球や鬼ごっこもしました。そこで「雪スケート」と呼んでいた長靴に縛り付けるスケートがあって、それがスケートとの出会いですね。本格的にスケート靴を履いたのは小学校6年生で、最初はアイスホッケーの選手でした。



弥生中学スケート部(後列右)

— へえ、上手だったのでしょうか。

足が速いのでホッケーを始めたのですが、小学校6年生のとき、クラス対抗のスケート運動会で1500メートルの選手がいなかったからと代理で出たら優勝してしまったのです。ホッケーの靴はスピードが出づらいはずなのに、それがスピードスケートの出発点ですね。

— ではスピードスケートに取り組み始めたのは中学生から？

はい。それほど速い選手ではありませんでしたが、中3のときに胆振大会で、5000メートルで優勝し、高校からスカウトが来ました。

— 500メートルではなく、5000メートルですか。

そうです。進学は、スケートが強かった苫小牧東高校と苫小牧工業高校の間で悩みました。東高校へ行けば大学に進学することになる。でも苫小牧には王子製紙があり、手に技術をつけることが大事だろうと考え、スケートの名門・苫小牧工業を選択しました。

## 「おまえには“信念”がない」

それまでは、夏場には野球やラグビーをしたり、サッカー、バスケットボールなど、いろいろなスポーツに取り組んでいました。しかし高校生になって本格的にスピードスケートだけに取り組むようになると、行き詰まりを感じるようになりました。それまでは“お山の大将”でいられたのに、先輩がみなインターハイで優勝するようなレベルですから。



苫小牧工高夏合宿(左)

— どのように克服しましたか。



高校3年、練習風景(手前)(1960)

友人からのアドバイスです。ものすごい秀才ですね。富士製鐵(現・新日鐵)室蘭に就職するために、地方から出てきたやつですよ。高校3年の夏でした。スケートでは大したことがなかったので、僕は「おまえは勉強一本にしぼったらどうだ」と言ったのです。そうしたら彼は「俺は、いつかおまえを抜くという“信念”を持ってスケートをやっているんだ」と言うのです。さらに、「おまえには“信念”があるのか。こんなところで満足するようなそんな小さな人間なのか?なぜ世界を狙わないんだ?」と。

— すごい同級生ですね。

「国内だけでなく、世界の舞台で戦うことを考えると、強い信念がなければひとたまりもなく潰れてしまうぞ。だから“信念”を持て。おまえはオリンピックへ行け」と忠告されました。それまでは長距離、中距離をやっていた、そのころから短距離の練習も始めたのですが、一緒に練習しながらいろいろアドバイスもくれました。小山堅司というやつで、今どうしているかは知りませんが、すごいやつでした。

## スプリンターに不可欠なのは“センス”

— ちょうど、私が取材に伺ったころですね。

はい。インターハイで2冠になり、国体でも2冠になり、全日本選手権では500メートルで並み居る強豪のシニア選手を負かして優勝し、「鈴木は短距離に転向か」と言われました。そんなつもりはありませんでしたが、なぜか500メートルは速かったですね。

— 「枠が空いているから500メートルに出なさい」と言われて、そんな簡単に適応できるものなのですか。



インターハイでの力強い滑走 (1961)

中・長距離は、滑って滑って滑りまくればそれなりのかたちにはなります。でも短距離の場合は、ダッシュ力、瞬発力、バネという条件が重ならないと無理です。バネ、パワーを瞬間に発揮するには“センス”が不可欠です。

— それらは500メートルを滑り込むことで身についたのですか。

違うでしょうね。僕は長距離のための練習をしていました。短距離の練習はしたことがありません。距離にかかわらず、スケートが好きだから、好きなスケート練習の一環として500メートルもそこにあったという感覚です。高3になって、「スプリンター」と呼ばれるようになってからも、長距離を含めて全部の練習をしていました。“センス”はあくまでも持って生まれたもので、植え付けることはできません。僕はとくにバネや瞬発力がすぐれているといったタイプではありませんでしたが、スケートの“センス”が抜群だったのだと思います。

— それはどんなところに現れるのですか。

一蹴りの伸びですね。それが他の選手よりも数倍優れていたようです。先輩の後ろについて足を合わせて滑ると、すぐに間隔が詰まってしまう。だから「先輩、僕が行きます」と前に出ると、今度は後ろと離れてしまうのです。

— 先輩から見たら嫌な後輩だったでしょうね。

## 意気揚々と王子製紙へ行ったものの……

— 高校を卒業して、あなたはいったん王子製紙に行かれましたね。

苫小牧では王子製紙は一つのステータスですし、親も喜んでくれました。でもインターハイの500メートルで優勝したあと、多くの大学から勧誘があって。好条件のところもありましたが、王子製紙に内定していたので、進学はあきらめたというかたちでした。

— でも1年で辞めて、明治大学に進学されています。何かきっかけがありましたか。



明治大学2年 (1962)

日本スケート連盟から、ソビエト連邦(当時)留学の話があったのです。こんな素晴らしい話はない。「行きたい!」と言ったら、王子製紙の答えは「ノー」でした。それで行けなくなり、落胆したこともあって、その年は成績が上がらなくてね。これでは小山と約束したオリンピックが遠ざかってしまう。自分の“信念”を見つめ直した結果が、大学進学でした。

## 王子製紙を辞め 試験勉強をして明治大学へ



明治大学スケート部工藤コーチ(左)と(1961)

— 明治大学を選んだのは?

王子製紙を辞めるとき、親父には申し訳ないという気持ちにはありました。でも勤当されてもいいから、スケートに懸けてみたいと思った。



そして9大学から勧誘が来ました。中には学費、合宿費を免除ばかりか小遣いまでつくところもあった。その点、明治大学は普通に試験はあるし、そういう免除は何一つありませんでしたが、そこがよかったのです。

— **あなたが会社を辞めるとき、「銭が豊かになると、人間、怠け者になる」と言ったのを知っています。そんな生意気なことを言って大丈夫なのかと心配にもなりましたよ。**

王子製紙に勤めていたら、当時の高卒の初任給としては大金である1万9000円が月々入ってきました。けっこう遊べる金額ですよ。それが大学に行っても同じ条件であれば、ハングリー精神が薄れると考えました。

— **試験勉強も大変だったでしょう。**

入試で落ちたら終わりですからね。一番苦労したのは英語です。工業高校でしたから実習ばかり。危険を承知で自分を追い込みましたが、苦しかったですね。

## 「東洋の魔女」から ヒントを得て“創意工夫”

明治大学に合格して晴れて大学生になりました。明治もスケートでは伝統ある名門校です。技術的進歩を信じて一生懸命練習したのですが、インターカレッジで2種目優勝した以外はダメで、全然勝てなかった。

— **行き詰まりましたか。**

自分のレベルは高いのに、集団トレーニングで1歳年下の他の1年生に我慢して合わせていましたからね。トレーニング内容が悪いのだとは思うものの、出口が見つからない。そんなある日、ぶらっと東京体育館にバレーボールのニチボー貝塚の練習を見に行っただけです。東京オリンピックで金メダルを取って「東洋の魔女」とうたわれるあの1年前ですよ。今まで見たこともない回転レシーブのすさまじさ。“創意工夫”によってバレーが変貌しようとしている。その逆転の発想にハッとしました。一見、バレーとかけ離れているようなトレーニングも、すべてバレーに直結しているのだということに気づきました。その日から、型にはめられたトレーニング方法から180度変えました。



インターハイで2冠を達成(1961)

— **どのように？**

ウエートトレーニングを取り入れました。といっても用具一式を買うわけではありません。大学では丸太ん棒に鉄の輪っかを縛り付けたものを持ち上げたりしていましたが、ちょうど国立競技場にウエートトレーニングルームができたのです。そこでトレーニング方法を教わり、スケートに必要な筋肉を鍛えるトレーニングを、自分の“創意工夫”によってアレンジしていきました。大学2年のときに合宿所を飛び出して、1人での練習を始めて以来、引退までの8年間、ずっと1人で練習しました。その結果、8年間で国内で破れたのは1度だけでした。

## インスブルック 冬季オリンピックは 0.1秒差でメダルを逃す

— **オリンピックには3回出場されました。1度目は1964年のインスブルック大会でしたね。あのときは……。**

0.1秒速ければ銀メダルでした。でも精一杯でしたね。試合前日まで、各国の選手の滑りを研究しました。お陰で、試合ではクタクタの状態でした。



初めて出場した世界選手権 500mで優勝(1964)

— ねえ。銅ではなく銀。あれは2位が3人いたのでしたね。私は北海道に住んでいたの、「銅メダルを受け取る人がいないのなら恵一にやれよ」という声をよく聞きました。でもね、あの0秒1差でメダルを逃すというのが、あなたとオリンピックの縁みたいなものを表していたのかもしれないですね。それでも、オスロ大会(1952年)の高林清高さん以来の入賞でしたよ。

それにあのときは、世界の趨勢を見極めて、国際レベルを体感し、次のグルノーブル大会につなげようというのが一番の目的でしたしね。その甲斐あって、その後の国際試合は破竹の勢い。1位しかありませんでした。

## グルノーブル 冬季オリンピックでは 金メダル候補



グルノーブルオリンピック(1968)

— 4年後のグルノーブル大会では、鈴木さんは押しも押されぬ優勝候補でした。絶好調という話も聞いていましたが、レース直前、ウォームアップで小石を踏んだとか？

それもあったし、その前から不運・アクシデントの連鎖がありました。グルノーブル大会の直前に、オリンピックの前哨戦といわれたユニバーシアード冬季大会(インスブルック)で成長株のケラー(西ドイツ)と対戦しました。ケラー

にはそれまで負けたことはなく、アドバイスすらしていました。そのケラーに0秒4差で敗れたのですが、僕としてはそれほど真剣にレースをしたわけではないので、気に留めてはいませんでした。その後、インツェルでの国際大会には本気で臨みました。メダルを争う米国やソ連の選手は39秒5の好記録を引っさげていましたが、みな2000メートル級の高地で出したもの。自信满满でインツェルにやってきた他選手たちを、私が39秒2か3のタイムでひっくり返したものですから、各国の指導者も「優勝は鈴木だろう」という目で見ていたはずですよ。

## 直前調整よりも 開会式参加を優先

インツェルでの国際大会のあと、有力選手が出場する大会がダボスでもう1試合あり、私は当然、参加するつもりでいました。しかし、監督に「インツェルに残って調整するから行かない」と言われました。

— なぜですか。

「開会式の参加に間に合わないから」だそうです。今だったらあり得ません。開幕直後に試合のある選手はレース優先ですが、当時は常に団体が1分1秒を守って行動するというのが、日本代表選手団の行動規範でした。他国の選手は開会式になど出ずに、ダボスで調整していました。インツェルの海拔は700メートル、ダボスは1500メートルで、高地のほうが記録は伸びるのでみな行きたいわけです。僕も38秒台を出しておきたいという思いがありました。でも監督とはケンカになるし、団長に直訴しても、返事は「ノー」でした。

— では日本の選手だけインツェルで調整したのですね。

そうなのですが、それがインツェルのリンクが使えなくなったのです。国際大会のあとオートレースがあって、外国チームはそれを知っていたのですよ。

## レース直前、砂利を踏んで エッジが欠けた

それでも、金メダルを取りに来たのですから、気持ちは切らさずに準備はしていましたよ。ところがです。グルノーブル入りして、ウォーミングアップをしようとリンクに足を踏み入れたら、公園にパイプを敷いただけの質素なリンクで、ごろごろしていた砂利を踏んづけでしまったのです。ウォームアップの2歩目で、ブレードのエッジが大きく欠けてしまった。それがスタート45分前でした。エッジが欠けても、エッジを研ぐ「荒砥」のストーンがあれば5分か10分で修復できたでしょう。

### — だれか持っていなかったのですか。

だれも……。当時、飛行機は荷物の重量制限が厳しく、重い物は機内持込にしていました。それで「もういらないだろう」と荒砥は抜いてしまっていたのです。仕方なく中砥のストーンを使いましたが、すぐに目が詰まって利かなかった。やっと研いだけれども、エッジが真っ平らで操作が利きません。例えていえば、いかだはボートに比べると舵がとりにくいでしょう。そんな状況でした。

## 2度のフライング、 そして痛恨のカーブワーク



グルノーブルオリンピック (1968)

### — うーん、大きな ハンディキャップを 背負いましたね。

それでもね、500メートルのスタートはどんぴしゃだった。なのに、30メートルほど行ったところで、ピストルが2発鳴った。フライングだと言うのです。実際はフライングなんかしていません。これが更なる不運でした。自分は

スケート靴をぎゅっと縛るタイプなので、一度ゆるめて、スターターをにらみつけて、縛り直して、さて2回目のスタート。すると今度は同走の相手がフライングですよ。ようやくスタートできたのは3度目でした。自分より前に滑っていたケラーのタイムとの戦いです。アウトコースから出て第1カーブを出てバックストレートに入っていました。相手との距離が詰まったところで、コーチから「ケラーのタイムに勝っている」とコールされました。僕は「コーナーの魔術師」と言われていたから、そのまま第2カーブを抜けて、と思った瞬間です。コーナーのライン側が柔らかく、スケートがざくっと入ってしまいました。



グルノーブルオリンピック (1968)

### — ああ……。

エッジは操舵できない状況ですから、体が棒立ちになってしまった。最後の100メートルは通常そこまでの勢いで惰性で行けるはずが、自分は惰性のない100メートル。ゴール直前は、スケート人生で一番悔しい瞬間でした。大差をつけていた同走者とは同タイムの40秒8。優勝したケラーのタイムは40秒3でした。いろいろな思いが渦巻いていましたが、吐き出せませんから、マスコミの取材に対しても「申し訳ありません」と言って黙っていました。

## ケラーと軽井沢で再戦し勝利

そんなところへ、堤義明社長から選手村に電話がかかってきたのです。

### — 鈴木さんは、明治大学を卒業して国土計画に入社していたのですよね。

そうです。その堤社長に「悔しいか」といきなり聞かれました。「言葉にできないほどです」と答えたら、「じゃあ、ケラーを連れてきて再戦するか」ということで、軽井沢で対決しました。オリンピックの翌月ですよ。

### — 結果はどうでした？





ケラーと直接対決し、39秒2の世界新で雪辱 (1968)

1発目、ケラーは39秒5、僕は39秒2の世界新記録でした。そうしたら「もう1回やろう」とケラーが言い出しまして。次はアウトとインのコースを入れ替えて、ケラーが39秒3、僕は39秒2で再び世界新を出しました。気が済まないケラーのリクエストで3回目をやったら、39秒5と39秒6でしたか、最後にやっとケラーが勝ちました。

— 鈴木さんの2勝1敗ですね。

ええ。金メダリストのケラーに世界新記録を出して勝てた。自己満足と言われても仕方ありませんが、やはり俺は強いんだとうれしい一瞬でした。対戦後、記者会見で「グルノーブルの金メダリスト、ケラーに勝った心境は？」と聞かれ、私は「ざまあ見ろと思っています」と答えてしまいました。

— ああ、あの有名な……。

「だれに対してですか？」と聞かれて「そんなこと言えるわけがないだろう」と、ちょっとした騒ぎになりましたよね。自分としては空しい気持ちは残っていましたが、とにかく「俺は強いんだ」ということを証明できた。そこはプライドですね。

## 札幌冬季オリンピックで 選手宣誓

— 1972年の札幌オリンピックで日本代表選手団の主将としての選手宣誓、あれは見事でしたね。あなたにあんな高い声が出るとは思いませんでした。意外に高くしてピンと響く声が印象に残っています。

外国人記者が「神の声だ」なんて言っていましたよ。あれは少々興奮していたからですね。あの宣誓文は全部で45秒でした。もう100何回と練習させられたので、嫌でも覚えてしまいます。だからあがることもありませんでしたが、寒かったなあ。無事に終わらせることができ、ああ、これが最後の大会なのだなと。



札幌オリンピックでは日本選手団主将として選手宣誓を行う (1972)

— よく晴れた日でしたね。鈴木さんは腰を痛めていた……。



当時は今みたいにMRIやCTなどなくてレントゲンだけでしたから、故障部分が写らなくて治せなかったのです。朝立てない。しびれる。立ってしまうと次の体勢になれない。その繰り返しで、あの大会はさすがにあきらめましたね。

## 西武ライオンズで日本初の専属広報担当

— 現役引退後は、プロ野球の西武ライオンズに異動し、専任でチームの広報担当になられました。今のプロ野球の広報の仕事のさきがけでしたね。

はじめは「なんで俺が行かなきゃならないんだよ」と思いました。プライドの高いがちがちの堅物人間が、世間知らずの18歳の子の身の回りの世話や、下げたくない頭を何度も下げたり。ああいうつらさも人生経験でした。

— いやあ、他チームはマネジャーが兼任で広報をしていた中、鈴木さんは専任でありがたかったですよ。インタビューのお願いをしたのに、こちらのプロデューサーがうっかり忘れていたときでも対応していただいたり、いろいろ協力してもらいました。

選手にあらかじめ取材内容を説明して、「これは受けたほうがいい」「おまえの将来もかかっているんだよ」「言葉遣いを間違えるなよ」などとレクチャーしていました。当時、プロ野球選手会の会長は中畑清さん(現 DeNA 監督)で、「12球団の広報の中でライオンズが一番、いや恵一さんが一番です」と言われたものです。

— 何年ほどやりましたか？

10年ほどですね。最初の監督は根本陸夫さん、次が広岡達朗さん、その次が森祇晶さんとつながっていき、野村克也さんが選手として在籍していたこともあります。「なぜトレーニンングコーチにならないの？ その能力があるのだからやればいいのか」なんて話もしました。広岡さんもそうでしたが、私の言葉を納得して真摯に受け止めてくれました。それだけ深みのある人たちでしたね。



(2006)

## 生涯の恩師は2人

堤社長からは相当怒られもしました。「おまえなんか辞めちまえ！」と何度言われたことか。悔しい思いもしましたが、でも自分のスケート人生は堤義明社長の存在なくしてはあり得なかった。今は感謝しています。

— そうすると、鈴木さんにとって、一番の“恩師”は堤さんになりますか。

トップレベルのスケーターになってからは堤社長ですね。それ以前は、高校のスケート部で「おまえに“信念”はないのか」と言ってくれた友人の小山。その2人です。中学、高校、大学、実業団と監督や指導者はいましたが、トレーニング内容は自分の考えに基づいて、すべて1人でやっていたといっても過言ではありません。それは疲れるのですよ。ときには嫌だ、練習したくないという気持ちが起きます。ゴルフ場でのランニングにも行きたくないと思うことがありました。一人はいつでも自由ですから……。よく耐えたと思います。

— ゴルフ場なんて、ふつうはワクワクするところなのにね。

つまり、責任は自分にあるのです。練習するのもしないのも、強くなるのもなれないのも、もっと言えば生きるのも死ぬのも自分次第。常に勝つ怖さと負ける怖さと背中合わせで、「今日は負けるんじゃないか」、そんな気持ちに打ち勝つために練習していました。気持ちが乗らない時の練習は、一步踏みだすのが本当につらかった。手抜き・息抜きは自由ですから。

## 不可能を可能にする ストイックさ

— 長いスケート人生で貫いてきた哲学といえ  
ばどんなことでしょうか。

不可能を不可能と思わず、可能にするという気持ちが常にありました。だから、「え、そんなことまで？」と思われるようなすべてのことを何もかも練習につなげました。

— 例えばどんなことを？

町を歩いていて赤信号になる。スタートダッシュの練習です。赤から青に変わるその瞬間にバツと出る。それと、スケートに適した姿勢のまま歩くとか、あと、背筋と腹筋を鍛えるために、穴を掘っては埋める、それを繰り返すこともやりました。「あの器具がないからトレーニングできない」なんて言い訳は許されませんでしたから。勝つための創意工夫はたくさんありました。

— ストイックですね。

私は“異端児”ですからね。みんながそう言うのです。自分を曲げない。だから現役時代は、選手も指導者もだれも近くに寄ってこなかった。

— あなたは何か反発することによって、自分の精神を高揚させていくタイプですね。いつも何かと闘っていた。

## 指導の極意は“根気”

— 鈴木さんのように一直線に努力をしてきた人が指導者の立場になったとき、選手たちを見て物足りなさを感じるのではないかと思います。どうでしたか。



札幌オリンピック (1972)

一番大変だったのは、自分ができたことを教えても選手たちはできない。「なぜこんなものができないんだ」という一言がつい出てしまう。指導を受けている側からすれば、とてつもないショックな言葉ですよ。今でもそう感じることはよくありますが、さすがに口にはしませんよ。そういうもどかしい苦しさの中で、ずっと教えてきました。

— 鈴木さんの中で何か変化があったのでしょうか。

ただ一つ、根気だけです。頭がすり減るぐらい我慢して、同じことを反復して練習させる。コーチングの極意は“根気”です。そしてコーチ自身が勉強しなければならない。いま JOC (日本オリンピック委員会) のコーチ

アカデミーでは、「コーチは選手に抜かれないように学び続けなければ駄目。コーチ業というのは大変な仕事ですよ」と話しています。それから、「いろいろな言葉に惑わされるなということです。自分の信念を持って、それを正しいと信じて突き進む。そのために勉強しろと。

— やはり“信念”にたどりつくのですね。では鈴木さんにとって、指導者冥利につきることといえば？

教え子がオリンピックに出場することですね。

## 強化費は金メダルを ねらえる選手に

— 今は日本スケート連盟の副会長、強化部長という要職に就いていらっしゃいます。その立場でのポリシーとはどんなものでしょう。

選手の目指すところはやはりオリンピックです。どの国も国を挙げてオリンピック対策をしてきます。日本もスポーツ基本法が機能してくるともっと変わってくるでしょう。選手たちに言うのは、「俺はおまえたち以上に、メダルへの思いが強い。やるなら、目指すところはオリンピックの金メダルしかないぞ。トレーニングについては自分たちでわかっているだろうから余計なことは言わない。その代わりに、俺は金（カネ）は探してくるぞ」と。「金を探してきて、注ぎ込んでやる。ただし、それは全員じゃない。金メダルは1個しかないのだから、1人にだけだ」と発破をかけます。



トリノオリンピック開会式（2006）

— 強化費をもらえるだけの強い選手になれ、ということですね。

もう時効だから言いますが、21～22歳のころ、世界に飛び出して痛感したのはお金の問題でした。「もし1000万円あったら？」と取材で聞かれたことがありまして、「その1000万円で、間違いなく金メダルを取る」と宣言しました。そのお金で、コーチとドクターとトレーナーとコミュニケーション面でサポートしてくれる人を雇って、外からフォローをしてもらえればという意図でした。そうしたら、ある方に叱られましたよ。「アマチュアに反する」と。

— そこですか。今のトップアスリートなら当然のように受けられるサポートなのですね。



バンクーバーオリンピック事前研修（2009）

## ジュニアには 惜しみなく注ぎ込む

— トップアスリートの育成と同時に、選手の発掘も進めていかなければなりませんね。

ジュニアにはいくらお金をかけてもいいと考えています。ただし、「駄目だと思ったら切れ。3年経っても進歩が見えないようなら切る、上に立つ指導者はそのぐらいの冷酷さを持ってよ」とアドバイスしています。一方で、その下にいるコーチには「冷静な判断を持って」とも言います。つまり、例えば僕が冷酷なことを言い出したときに、「いや、それはちょっと違います。こういう問題はありますが、今はこういう懸案事項を抱えているのでそこがクリアになれば……」など、言い訳まがいでもいいからと。

— 上の立場にいる指導者は時には冷酷な決断力が、その下のコーチは選手をフォローする冷静な判断力が必要ということですね、なるほど。

## セカンドキャリアを見据えて の現役生活

— アスリートが現役を終えた後の「セカンドキャリア」については、どのようなサポートをされていますか。



ケラー氏と35年ぶりに再会（2007）



セカンドキャリアは、言い換えればどの段階まで現役生活を続けるかということになりますよね。僕は選手を3つのレベルで分けて考えています。国際レベル、国内レベル、ローカルレベルです。実際、レベルが低いのに現役のキャリアを続けたい選手が多い。オリンピックで金メダルを取った選手には、間違いなくスポンサーは付きますよ。でも銀や銅ではなかなかつかないのです。ましてや国内レベルの選手にはつきません。それでも選手は競技を続けたい。月10万でも20万でもいいから、となるわけです。そういう選手たちに、僕から「辞めろ」とは言えません。国内で楽しんでもらおうしかない。しかしそうやって続けても、勝てないと次のスポンサーは見つかりにくい。だれが冷酷な決断を下すかですよ。

— 鈴木さんは明治大学スケート部の監督もされていますよね。

新入生には、礼儀に始まり礼儀に終わるということをはたき込みます。厳しく接して叱咤激励をします。そうでないと選手は育たない。腐ったリンゴが一つ混じると、それは伝染してしまいます。本来、キャリアというのは自分で判断するものですが、はっきりと「お前はスケート辞めろ」と引導を渡すこともあります。「大学を卒業してから20年後、おまえたちのポジションはどこにあるのかということを考えてみる」。そう言うと、学生たちは真剣に自分の将来を見つめてくれます。

— それは鈴木さんご自身の経験からくる言葉でもあるのですよね。

僕は西武ライオンズでもそうですし、国土計画でも仕事をしていましたからね。もらっている給料の3倍稼がないと厳密には「月給取り」と名乗れないそうですが、月給泥棒にならない程度にきっちり働いていました。

## スポーツ基本法の具現化に向けて 国の動きが見えない

— スポーツ基本法ができましたが、どのように具体化していったらいいと思いますか。

具体化、全くされていませんよね。2020年の東京オリンピック招致を中心にしてスポーツ立法が動かされれば、すべてのものが動きやすくなるとは思いますが。政治状況を勘案すると、末端が動く方法を考えないといけません。それは何かというと、選手自身がアピールすることしかないでしょう。ウインタースポーツのシーズンですが、皆、2020年の招致バッジはつけていてもそれだけ。各競技会場にポスターもない。これじゃスポーツ立法なんて生きてきませんよ。オリンピックは都市が開催するとはいっても、どこも国ぐるみで招致活動をしています。でも日本は東京都だけが動いていて、国がやっているイメージがないと思いませんか？

— なるほど、そうですね。

スポーツ立法は国の法律ですよ。JOCがバックアップするといっても、動きが何も見えてこない。議員が超党派で集まって何かやろうという動きも、言い出してから何年経つのですか。マスコミもそう。リーダーシップを取っていける人間が不在で、ただ周りがワイワイ騒いでいるだけ。それでは駄目ですよ。



バンクーバーオリンピック結団式記者会見（2010）

## リーダー不在の2020年 東京オリンピック招致

— 2020年のオリンピック開催地は9月7日に決まります。3都市の中では東京は非常に安全ですし、有利と見られていますが、いかがでしょうか。

いいえ、僕は不利なような気がします。東京は1度、オリンピックを開催していますが、イスタンブールもマドリードも開催経験がありません。





ロンドンオリンピック後の銀座凱旋パレード (2012)

— **ただ、ユーロ圏は経済事情がよくないという面がありますよ。**

IOC (国際オリンピック委員会) もヨーロッパですからね。「これを契機に」とユーロ圏の人たちが立ち上がれば、相乗効果で大きな経済効果が生まれる可能性があります。日本は一体何をしているのか。東京都が音頭をとって一瞬火がついても、ぱっと落ちて消える線香花火のようなもの。それをぼんぼん燃やし続けるだけの火力が足りない。スポーツ界全体がもっと生きるか死ぬかの気持ちで取り組まなければ、だれが音頭を取るのか。その立場にあると思う JOC が、招致プロジェクトチームをつくって動かない限りはできないと思いますよ。でも実際のところ、JOC は次のオリンピックに向けてのメダル獲得プロジェクトだけで手一杯です。

— **本来は JOC が組んだプロジェクトチームが何をどうアピールするか戦略を練り、日本国民に対して、そして世界に対してアピールしていかなければならないのではよね。**

日本の国民性として、支持率のアンケートで「どちらでもいい」という答える人が多いでしょう。あれは今のカウント方式だと反対票になってしまいますからね。前回、2016年大会の招致に落選したときからずいぶん時間があつたのに、検証が足りないなのでその失敗を活かすこともできない。1964年の東京オリンピック、1972年の札幌オリンピックの招致のときはもっと大いに盛り上がっていましたよ。

— **招致レースでの勝利を目指す情熱が足りない……。**

そうなのです。でも、「2020年東京開催決定!」と歓喜したい! 2020年は生きていないかもしれないけど……。

## 銀や銅に 甘んじることなかれ

— 鈴木さんは世界記録を何度も塗り替えても、ほんの小さな邪魔が入ってオリンピックのメダルをつかめなかった。考えてみればこの対談で今までお招きしたのはメダリストばかりでしたので、あなたをここに呼ぶのは酷なことではないかとも思いました。

ですよね。

— **でもこういう悲運の名選手がいて、その人がまたスポーツ界のために努力をしているということに価値があると考えられるのです。まだ道の途中ですが、ここまで走り続けてきた、滑り続けてきたという満足感がありますか。**

あります。それがあから、まだまだ続けているのです。今、スケート連盟では副会長の立場で、全国各地で挨拶をします。普通なら激励の挨拶ですが、僕の場合は違って、ひたすら叱咤します。

— **選手たちの反応はどうか。**



トリノオリンピックではスピードスケートチームの監督を務める  
(左から佐藤信夫、鈴木恵一、平松純子) (2006)

真剣に聞いてくれる選手ほど伸びます。昨夏のロンドンオリンピックでは史上最多の38個のメダルを取って、メダリストはマスコミの差し出す座布団にひよいと乗せられていました。でも、金メダルは7個でした。もうそこで辞める選手はそれでいいけれども、銀や銅だった若い選手は、そんなところに出ていないで、リオデジャネイロで金を狙えと言いたい。各競技団体はとっくに動き出しているはずですが、まだ甘えを捨てきれない選手が多くいるように感じます。

## ソチ冬季オリンピックに向けて

— 前回のバンクーバー冬季オリンピックでは、鈴木さんは日本代表選手団の総監督を務められました。1年後には、ソチ大会が開幕します。準備や手応えはどうですか。

1シーズン先に迫っているので、強い選手にしか強化費は出さないと明言しました。フィギュアスケートは混戦になるでしょうね。日本が男女ともこれほどのハイレベルな時代は、もうしばらく来ないかもしれません。だから、次世代の育成も早め早めに手を打たなければいけません。僕が考える指導スパンは4年ではなくて6年です。6年でトップに引き上げることを考えます。つまり、中学1年からです。

— ジャンプのホープ、高梨沙羅選手は？

みんな期待するでしょう。でもあまりプレッシャーをかけたくないな。

— スピードスケートでは？

今、心から本気でオリンピックに行きたい、メダルを取りたい、世界的な選手になりたいという強い執念が見えているのは3選手だけ。加藤条治、小平奈緒、穂積雅子です。

— 3人ともバンクーバーでもメダルを取っていますよね。加藤選手は男子500メートルで3位、小平選手と穂積選手は、女子団体パシュートで銀メダリストになりました。

ええ、ソチでは更なる上を目指し、穂積は5000メートルでチャンスがあります。小平は500メートル。加藤はバンクーバーでは同僚の長島圭一郎に敗れての3位ですから、悔しさが残っています。だから金メダルがあるかもしれませんよ。

— それは楽しみだ。期待しています。きょうはありがとうございました。



バンクーバーオリンピック開会式入場行進 (2010)

## スケートの歴史

1920 大正9	フィギュアスケート愛好者たちにより 日本スケート会が結成	1954 昭和29	第48回男子世界スピード選手権を札幌で 開催。他の競技も含めて、日本で最初の 世界選手権大会
1924 大正13	スピード・フィギュア・アイスホッケーの 全体的発展を目指して、全国学生氷上競技 連盟が結成	1955	日本の高度経済成長の開始
1926 大正15	日本スケート会が 国際スケート連盟（ISU）に加盟	1962 昭和37	女子世界スピード選手権で高橋かね子が1500m で3位入賞、戦後女子選手として初めての表彰 台。フィギュアで冬季ユニバーシアード大会に 初参加し、平松（上野）純子優勝、佐藤信夫が2位
1927 昭和2	学連OBを中心に大日本氷上競技連盟が創立	1964	鈴木恵一氏、第58回世界選手権 （ヘルシンキ）スピードスケート500m優勝
1928 昭和3	日本スケート会を中心に日本スケート連盟が 結成	1964	鈴木恵一氏、インスブルック冬季五輪に出場
1929 昭和4	大日本氷上競技連盟と大日本スケート連盟が 合流し、大日本スケート競技連盟を創立、よ うやく全国組織が一体化	1964	東海道新幹線が開業
1930 昭和5	大日本スケート競技連盟主催の 第1回全日本選手権開催	1965	鈴木恵一氏、第59回世界選手権 （オスロ）スピードスケート500m優勝
1931 昭和6	大日本スケート競技連盟が 大日本体育協会に加盟	1966	鈴木恵一氏、第60回世界選手権 （イェーテボリ）スピードスケート500m優勝
1934 昭和9	第7回明治神宮体育大会にスケート競技が 加えられ、スピード、フィギュア、アイスホッケー の3競技を実施	1967	鈴木恵一氏、第61回世界選手権（オスロ） スピードスケート500m優勝
1936 昭和11	大日本スケート競技連盟が日本スケート会に代 わり、国際スケート連盟のメンバーとして承認	1968	鈴木恵一氏、グルノーブル冬季五輪に出場 選手宣誓を行う
1942	鈴木恵一氏、樺太に生まれる	1969	男子世界スピード選手権で鈴木恵一が 500mで3連覇 インツェルの国際競技会で鈴木恵一が39秒2 の世界新記録をマーク
1945 昭和20	終戦に伴い、大日本体育会の部会が解消され、 大日本スケート競技連盟も新組織で再出発	1969	アポロ11号が人類初の月面有人着陸
1945	第二次世界大戦が終戦	1972 昭和47	第11回五輪冬季競技大会を札幌で開催
1946 昭和21	大日本スケート競技連盟の戦後初の全国代表 委員会を開催、連盟の構成単位を地域別から 都道府県別に改組	1972	鈴木恵一氏、札幌冬季五輪に出場
1947 昭和22	第1回国民体育大会スケート競技を戦後初の 全日本選手権大会を兼ねて八戸市で開催	アイスホッケー部門が分離独立	
1947	日本国憲法が施行	1973	オイルショックが始まる
1950	朝鮮戦争が勃発	1976	ロッキード事件が表面化
1951 昭和26	スピード・フィギュア共に戦後初めて 世界選手権に参加し、内藤晋が500mで優勝	1977 昭和52	世界フィギュア選手権を東京で開催し、 佐野稔が日本選手初の3位と健闘
1951	安全保障条約を締結	1978 昭和53	日本スケート連盟が社団法人として 法人格を取得
		1978	日中平和友好条約を調印
		1979 昭和54	世界フィギュア選手権で渡部絵美が 日本女子初の3位
		1980 昭和55	ショートトラックISU選手権で加藤美善 （500m、3000m）、加藤美佳（500m、1000m） が女子種目の完全優勝を分け合い、総合でも 1位、2位
		1982	東北、上越新幹線が開業

1984  
昭和59

サラエボ五輪で北澤欣浩が500mで銀メダル、スケート日本人初のメダル獲得

財団法人日本スケート連盟として認可

**1984** 香港が中国に返還される

1988  
昭和63

カルガリー五輪で黒岩彰が500mで銅メダル獲得、橋本聖子は出場した全種目で入賞。ショートトラックは公開競技となり、獅子井英子が3000mで金メダル、男子500mで石原辰義が銀メダル、女子3000mリレーでは銀メダルと、合計3つのメダル獲得

1990  
平成2

アジアスケート連盟設立

1992  
平成4

アルベールビル五輪で橋本聖子が1500mで念願の銅メダルを獲得、男子500mで黒岩敏幸が銀メダル、井上純一が銅メダル、1000mで宮部行範が銅メダルを獲得。フィギュアでは伊藤みどりが女子シングルで銀メダル、ショートトラックは正式種目となり、男子5000mリレーで銅メダル獲得

1994  
平成6

リレハンメル五輪で堀井学が男子500mで銅メダル、女子5000mで山本宏美が銅メダル獲得

世界フィギュア選手権で佐藤有香が女子シングルで優勝

**1995** 阪神・淡路大震災が発生

1998  
平成10

長野五輪を開催。清水宏保が男子500mで金メダル、1000mでも銅メダル獲得。女子500mで岡崎朋美が銅メダル獲得。ショートトラック男子500mでは西谷岳文が爆発的なスタートで金メダル、植松仁も銅メダル獲得

2001  
平成13

第56回新世紀・みやぎ国体・冬季大会からショートトラックが正式競技

世界距離別選手権男子500mで清水宏保が世界新記録を出し大会4連覇

2002  
平成14

ソルトレークシティ五輪男子500mで清水宏保が銀メダル獲得

2006  
平成18

トリノ五輪フィギュア女子シングルで荒川静香がアジアで初の金メダル獲得

**2006** 鈴木恵一氏、日本スケート連盟理事に就任

**2008** リーマンショックが起こる

2010  
平成22

バンクーバー五輪男子シングルで高橋大輔が日本男子初となる銅メダル獲得、女子シングルスでは浅田真央が銀メダル獲得。スピード男子500mで長島圭一郎が銀メダル、加藤条治が銅メダルを獲得、女子チームパシュート(穂積雅子・小平奈緒・田畑真紀)は銀メダル獲得

**2010** 鈴木恵一氏、バンクーバー五輪日本選手団総監督

**2010** 鈴木恵一氏、日本スケート連盟副会長に就任

2011  
平成23

東日本大震災により東京での開催が中止となり急遽ロシアでの開催となった世界フィギュア選手権で安藤美姫が2度目の優勝、小塚崇彦が2位



## フォトギャラリー



弥生中学スケート部（後列右）



苫小牧高夏合宿（左）



高校3年、練習風景（手前）



インターハイ初優勝（1960）



インターハイでの力強い滑走（1961）



インターハイで2冠を達成（1961）



明治大学2年（1962）



明治大学スケート部工藤コーチ（左）と（1961）



インスブルックオリンピック500mで5位入賞（1964）



インスブルックオリンピックで仲間に胴上げされる（1964）



グルノーブルオリンピック (1968)



グルノーブルオリンピック (1968)



グルノーブルオリンピック (1968)



グルノーブルオリンピック (1968)



1968年12月。500mで39秒2の当時の世界タイ記録をマーク (1968)



ライバルであったケラー選手 (1972)



ケラーと直接対決し、39秒2の世界新で雪辱 (1968)



## フォトギャラリー

---



夏季トレーニング (1968-71)



札幌ブレ大会 (1971)



札幌オリンピック (1972)



札幌オリンピック (1972)



札幌オリンピック (1972)



コーチ風景



(2006)



ケラー氏と35年ぶりに再会 (2006)



トリノオリンピック開会式 (2006)



トリノオリンピックではスピードスケートチームの監督を務める  
(左から佐藤信夫、鈴木恵一、平松純子) (2006)



バンクーバーオリンピックでは日本  
チームの総監督を務める (2010)



バンクーバーオリンピック事前研修 (前列右から3人目) (2009)



バンクーバーオリンピック  
記者会見 (2010)



バンクーバーオリンピック開会式入場行進 (2010)